

白神山地周辺のニホンジカ 冬季の餌はチシマザサ

弘大・ムラノ助教ら生態調査

弘前大学農学生命科学部のムラノ千恵助教(46)ら研究グループは、世界自然遺産の白神山地周辺に侵入したニホンジカについて、冬季にチシマザサを餌としていることをふんのDNA解析から明らかにした。繁殖力が強く、侵入地域の植生に悪影響を及ぼすニホンジカの個体数の把握、生息域の特定につなげることが目的で、白神山地の豊かな生態系、環境を守る保全活動への活用が期待される。(稲葉智絵)

ふん採集、DNA解析



ニホンジカの食痕が残るチシマザサ(ムラノ助教提供)



ムラノ千恵助教

研究成果は8月、日本哺乳類学会の学術誌「哺乳類科学」に掲載された。

近年、ニホンジカの生息域が全国で急速に拡大。各地で高山植物や森林の下層植生の喪失、餌が競合するカモシカの減少など、さまざまな問題を引き起こしている。

県内では江戸時代以降、ニホンジカは確認されていなかったが、2014年ごろから再侵入を確認。17年ごろからは白神山地周辺や八甲田での目撃数が増加している。

年には生息が確認されていなかったニホンジカ。ムラノ助教は繁殖力が強く、環境によって食べるものを変える特性を挙げて「適切な保全対策が重要で、それには個体数、生息状況を把握する必要がある」と説明した。

ムラノ助教、環境省東北地方環境事務所西目屋自然保護官事務所のアクティブ・レンジャーらで構成する研究グループは、生息モニタリングの指標となる植物種を特定するため、2021年から白神山地周辺でニホンジカ、カモシカが冬季に餌とする植物の調査を開始。23年までの2年間、2カ月に1回のペースで山に入り、情報カメラで写った場所の周辺で食痕を確認し、ふんを採集した。冬季に採集したふんのサンプル数は13

個体数や生息域把握 環境保全へ活用期待



白神山地周辺で確認されたニホンジカ(東北森林管理局提供)

(ニホンジカ8、カモシカ5)だった。

DNA解析の結果、ニホンジカのふんからはチシマザサ、ヒメアオキなどが多量に検出された。特に、白神山地周辺地域に広く生育するチシマザサは七つのサンプルから検出され、DNA量の割合は3番目に多い3.2%だった。一方、カモシカはヒメアオキ、スギが多く、チシマザサは検出されなかった。

これにより、ニホンジカは冬季、カモシカが食べないチシマザサを重要な餌資源としていることが推定され、残された食痕が行動範囲など生息域の把握に活用できることが示された。

ムラノ助教は「冬季限定だが、保全対策の基礎となる情報を得ることができた」と達成感をにじませた。ただ、今回の研究では動物への影響など全体像の把握には至っていないことから、「取り返しがつかなくなる前に有効な手を打ち、生態系の損失を食い止めなければならない」と力を込め、積雪がない春から秋の調査を進めていく考えを示した。

この画像は、当該ページに限り“陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。